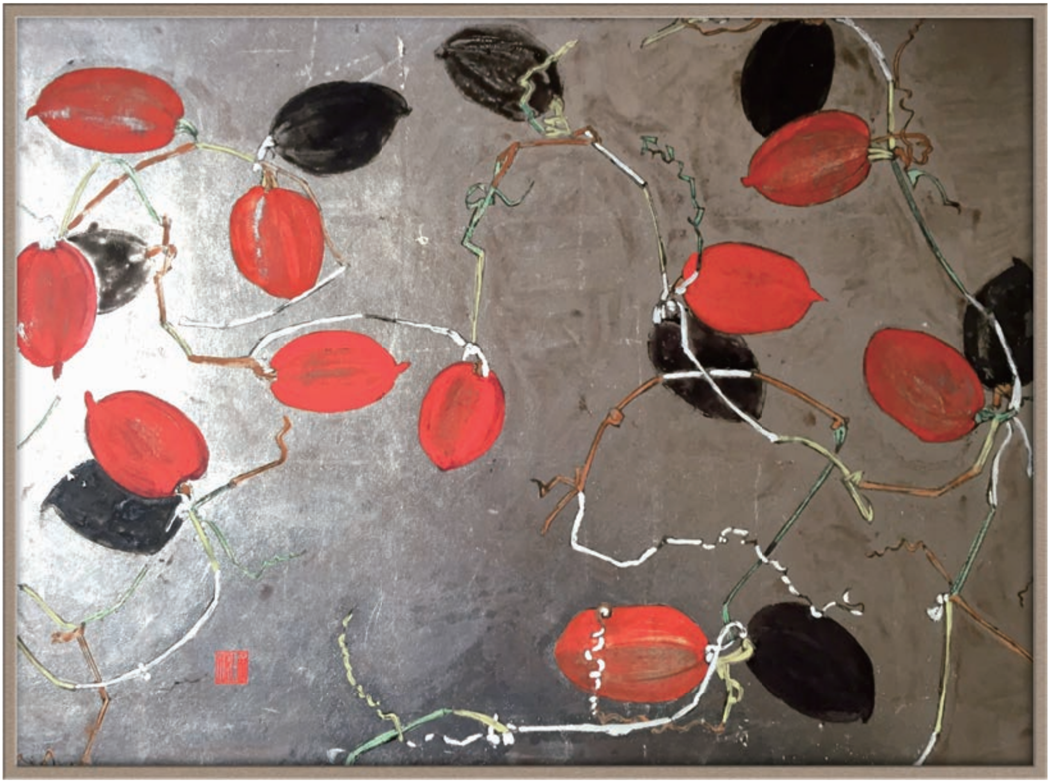
三河 アララギ

２０１９年 １２月　師走 しわす

十　二　月　号

第 六十六 巻　第 十二 号



ニューヨーク日記（158） http://blueshoe.copetin.com/

BlueCat, Shoe Lady

ICELAND
Blue Shoe Diaries

アイスランドに来てみました！ この世じゃない感じでとても神秘的な場所。ここはガイザーがある所で温泉もあって何分おきかに吹き上がっていた！ 冬の間は日照時間が少ないって言うけど思ったほどではなかったから結構ちゃんと「昼間」も経験出来た気分。あと結構意外なのはNYよりあったかいよ〜！ それから食べ物が凄く美味しい！！ クジラやパフィン食べてみました。全然イケる！ そうそう、オーロラを観るために来たのよね。写真には失敗したけど素晴らしかったよ！ その上満面の星空だった。いつまでも見ていたかったな〜

Came to Iceland!! It’s such a beautiful and surreal place. Really, out of this world. Here’s where the world famous Geiser is (which you can see it exploding into the air every 10 minutes or so). Most of the water puddles are actually naturally (lava) hot water so the steam gives the area a mystical feel. I was under the impression that the days are really short in the winter but there was surprisingly enough daylight to make it feel more “normal”. What was more surprising was that Iceland is warmer than NY in the winter :D. And how amazingly delicious the food is. I got to try some whale (as a steak) and puffin! Oh and yes, the aurora! The main purpose of the trip!! Was incredible. and to complement that, the night sky full of stars was hypnotizing.

目次

第六十六巻第十二号(通巻七九二号)

表紙・烏瓜　今泉　由利（1）
ニューヨーク日記(158)　Blue Shoe（2）
アカンサスの徑　御津　磯夫（4）
ははきくさⅡ　大須賀寿恵（5）
歌集「續草々」　今泉　米子（6）
はゝきくさⅡ　河原　静誠（7）
赤マンマの径　岡本八千代（8）
記録的　弓谷　久子（10）
衣被ぎ　今泉　由利（12）
おかわり　安藤　和代（14）
世界平和　阿部　淑子（15）
揺れる　伊藤　忠男（16）
北野天満宮　白井　信昭（17）
木屑の香　清澤　範子（18）
台風　森岡　陽子（19）
マサギマダラ　杉浦恵美子（20）
ホトトギス　山口千恵子（21）
父母祖父母　矢崎　直人（22）
雨　夏目　勝弘（23）
『ことよせ』　いーはとぶ
森　厚子（24）
山﨑　俊子（24）
三田美奈子（24）
水野　絹子（24）
牧原　規惠（24）
稲吉　友江（25）
鈴木美耶子（25）
吉見　幸子（25）
牧原　正枝（25）
石田　文子（25）
現代学生百人一首　東洋大学
日野萌々香（26）
森田　七海（26）
菅谷　学毅（26）
東　美緒（26）
大山　桃生（27）
大木　晴香（27）
佐々木　萌（27）
府金　詩子（27）
贈呈誌　森岡　陽子（28）
童謡　サンタのおじさん　ありがとう
高橋　育郎（30）
『俳句』　松本　周二（32）
田中　清秀（32）
浜田　紀政（33）
重野　善惠（33）
山元　正規（34）
森岡　陽子（32）
植村　公女（34）
今泉　如雲（34）
今泉　由利（35）
杉浦　弘（35）
かさね吟行会　田中　清秀（36）
『酔いの徒然』(92)　丸山酔宵子（38）
楽しい時間(85)　山本紀久雄（40）
絹の話(109)　今泉　雅勝（42）
「江上浩二の独り言」　江上　浩二（44）
本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬　本田　勇気（46）
漢詩研修(三十八)　平井　茂行（48）
奥の細道　中屋　保之（50）
越州吟行　横山　精真（52）
萬葉秀歌の鑑賞　津之地直一（54）
雨(2)　夏目　勝弘（56）
「水魚」のことから(227)　岡本八千代（57）
編集室だより〔二〇一九年十月〕　今泉　由利（58）
野菜・まんだら(22)　（59）
「三河アララギ」について　（60）

アカンサスの徑

御津磯夫

金をいだして得たる黒松の鉢一つ寒げに見ゆるわれの鉢棚

並びたつくろがねもちと柊と黒くゆらがず庭師帰れり

自ら生えたるゆづり葉大木となりて庭師ら鋏してゆく

雲のかげ過ぎゆくときに昏らみつつ木群ひととき吹かれさわだつ

はしばみの細き一枝の花房のほぐれそめつつ部屋冴えかへる

石の面を見てゐて濡るることもなし折りふしの風に風花の舞ふ

やうやくに思ひいだしし木の名また忘れて房のほぐれゆく下

寒肥もいくとせぶりぞ父の代より小さくなりゆく牡丹つたへて

ザラ紙にプリントの三河アララギ創刊号尊びもとめ人きたりたり

大海人（おほあま）に添ひたたかひて強かりし鸕野讃良（うののささら）のみあとといへば

ははきくさⅡ

大須賀寿恵

実習を終へし調理員等と校庭の白樺の下の風に吹かるる

手押しポンプに水汲む音の聞こえつつ万葉五首の輪読すすむ

双手にてかたみに脛をもみながら臥しゐて一日暮れてゆきたり

背表紙の文字すり切れし永年保存の人事簿冊の表紙張り替ふ

永年と十年五年の保存年限を背表紙の枠に朱にて書きゆく

会議終へ来りし吾の机の上に木曽馬籠よりの土産の手毬

一羽のみ屋根にとまりてゐし鳩の番となりて舞ひ立ちてゆく

幼きを培ひ来りし彩雲閣八尺になりぬ吾が事務室に

両足に麻痺あることを常として復職審査の事務に暮れゆく

栗のいが五つならべて遅進児の健二は描きぬ九月のカレンダー

歌集「續草々」

今泉米子

午後よりは雨となるべし奥庭の自らなる南瓜を收む

たまたまに傘さしゆきぬ道の辺の底紅むらさきの木槿の花に

ブェノスアイレスへ行きたるならむ草芙蓉淡紅色に染めにき着物

藪茗荷茜金線草（やぶみょうがあかねみずひき）をどり子草わが手を洗ふ北窓の下

針の孔（めど）通しあぐねてわれゐたり嘴細烏（はしぼそからす）のまひるまの声

葉替すみて楠も白樫も細やかにしげりつつ梢高く降る雨

台風の予報きこえて芭蕉葉のまたけき広葉の雨に昼餉す

鐘楼堂の甍（いらか）の上に高々とメタセコイヤ見ゆわれの窓より

磯夫歌碑をめぐらす砂に落ちてゐるメタセコイヤの緑の球実

ほのぼのと紅にほふ草芙蓉グラスに挿して診療はじまる

はゝきくさⅡ

河原静誠

腸の癒着の痛みに耐えて園児等と石けりをする吾の一日

みなし子のかきし脅迫状を話し合ふ保母となりたる吾もみなし児

幼児劇「仲よし」のいまはじまりぬ幾度も書き直しつつわが書きあげし

「仲よし」の仮面は園児等それぞれに菓子の袋にて作らしめたり

袴着け傘を片手に太郎冠者踊り了へたり擬白の秀雄

獅子舞の鼓はボール紙を張りあはせ保母われの作るまた徹夜して

研究テーマの一つと今日は園児らの交友テストの採点をする

三才児に打楽器教へ今日一日吾の仕事のたのしかりけり

園児の手をかたくにぎりて今日もわが二級国道を横切りて行く

健やかになりし今年は園児らとお面をつけて豆まきしたり

赤マンマの径

蒲郡　岡本八千代

赤まんまに触れつつ歩む庭の径行くも帰るも赤マンマに触れて

生（なま）塵を捨てにゆくなりシルバーカーに三袋も乗せてよぼよぼの吾

手櫛（ぐし）にて髪ときて化粧了へまた籠り部屋にこもるわれかな

啄木の使ひしことばの「なにがなし」われもおのづと思ふ寂（さみ）しさ

夕方に着くかもしれない「三河アララギ」草むらの庭に佇ちて待ちをり

こんなにもダチュラの花は咲くのかと問ひつつ秋のこの花の下

失ひし鋏二丁がそれぞれの処より出で嬉しかりけり

鋏出でしこの夜に焼きし卵焼美味しい美味しいのわがひとり言

雨また雨傘さして佇つ雨の庭ホトトギスの花咲きてをりけり

やうやうに落ちつきて静かにもの思ふわれはわれなりにこのひとときよ

何事も成るやうに成るとまた思ふ秋の夜長の心の自由

「西牕(そう)の燭(ともしび)を翦(き)りて」語り合ふ人もなきままこの秋の夜半

夜々に利休香を香(かお)らせて吾なりに称(とな)へる「歸命無量」を

白檀の利休香のただよへる佛間にはたつた独りのわれかな

君とわれ幻(まぼろし)のごと過ぎゆきてやうやう一人(ひとり)のわれを信じる

記録的

豊川　弓谷　久子

記録破りの残暑続くと書き置かむ十月朔日今日の日記に

雑草の茂りに茂りし草庭を子等は刈りをり暑き陽のもと

泡立草も茅もすべて刈られたり広々とせし庭に佇ずむ

縁先にずらりと並べぬ子の丹精の椿と我の紫陽花の鉢

石臼も火鉢も瓶もすり鉢も片付けられをり庭の片隅

少しづつ草の根を掘る少しでも出来る喜びかみしめながら

少しづつもとに戻るか我が体力も腰の痛みも軽くなりをり

失敗を繰り返へしつつブラウスを三日かかりて縫い上げにけり

棘々のピラカンサの大樹剪りくれぬあとかたも無し魔法の如し

避難準備の放送入りたり大型の台風十九号迫り来たるか

庇打つ雨の音けはし台風の大雨降り続く一日一夜

災害のニュースが一日流れをり事無くすぎしを感謝せむ

くれないの花の咲く日を楽しみ待たむアロエに花茎すっくと立ちぬ

久びさに戻り来りし秋空に御堂山蒼しその空清し

台風と大雨と大河の氾濫と多難続きて十月も過ぐ

衣被（きぬかづ）ぎ

東京　今泉由利

衣（きぬ）とみゆ皮よりつるりとい出こしてその真白よ私の糧（かて）

お月様にお供へしたり衣被ぎその真白は真白に食（は）ぶ

隠居する祖父に従ひき四六時中昔昔を教へ賜ひき

小さきものその小さきを幾万か皮と装ふけし餅得たり

けし餅の箱に描かれしけしの花そして私にけし粒の味

政宗の漢詩と共に届きたり笹かまぼこに歴史を加ふ

笹かまぼこ亘理郡亘理町逢隈鹿島字西鹿島より来たれしことを

唐津焼茶陶具提へ　戦争にゆきにし父よ私の父

太陽に逆ひ伸びをり一つ枝ブーゲンビリアを理解しようと

飛鳥寺の釈迦如来の御手にて縵綱相に甘へる甘へる

釈迦如来禅定印を彫るところここに思ひつ縵綱相を

左手の上に右手を重ねつつ両手の親指の先を合はする定印

「三十二相八十種好」知らざるままに今日までは

菩提樹の元で悟りの禅定印御手を彫りをり敬（うやま）ひにつつ

装飾を御身にもたれぬお釈迦様今日の私のネックレス外す

おかわり

豊川　安藤　和代

けたたましモズ啼く朝吾も又背筋伸ばしてキッチンに立つ
吾作るおかずは名等なきにして嬉しや孫はおかわりを言う
サラダにもアマ油一滴健康で長生きしたいと思いを込めて
散歩道会えばいつしか友となりはずむ会話に犬も尾をふる
麦茶の香どこか似合わぬ朝の風庭にピンクのコスモス揺るる
世は変り人の宝もかわりたりそれでいいのだモズの高啼き
実り田は雀おどしの凧が舞い老いの心も遊ばせくるる
コンバイン行ってもどりて二回程広き稲田は刈り取られゆく
落穂拾う鳩と雀はサッカーをしている如く姿勇まし
風涼しひつじ田続くその道を園児の列が賑やかに行く
診察を待ちくたびれて眠る幼額の冷ピタはがれつつあり

猛暑ゆえ疲れつかれしコスモスにことばかけつつ水を注げり
いと寂し秋の日暮れの赤トンボ親はいぬのか友はいぬのか

世界平和

横浜　阿部淑子

即位礼正殿の儀で天皇は世界平和と国民の幸願わる
天皇の高御座からの御言葉は慈愛溢れて感涙に咽びぬ
吉野氏の剛柔の心実を結び電池開発ノーベル賞に輝く
深刻な気候変動増す中に電気自動車広まる期待
十九号の台風被害は十二都県堤防決壊目を覆うばかり
幼き日「あっという間に嵩を増す水は怖い」と重ね告ぐ祖母
日本の歴史刻んだラグビー戦極限の業に日本コール止まず

揺れる

大阪　伊藤忠男

気配りの極意見つけた空の旅微笑みながらじっと聞き入る
飛び立ちて間無し機内は茜色地上は最早夕闇なのに
我の歌詠むでは無くて思ふまま見たまま聞くまま書き記すのみ
釈迦像を彫り進めるか友の顔知恵慈悲功徳浮かぶ言の葉
美しき心の持ち主八千草の枯れた演技に乙女の香り
また一人尊き命召されしや肩抱き喜寿の祝い虚しや
きっと来るきっと成るなり我が夢の叶うその日を終着駅に
朝ぼらけ野焼きの煙西風に吹かれたなびく肥後の山里
束の間の秋晴れ心静かなり朝日に向かい手を広げたる
災害に災害重ね温暖化今もて無しと言うは誰ぞや
ガラス越し竹に雀で無くとても葉枝を揺らす名も知らぬ鳥
夕闇に揺れる湯けむり肌覆う手足伸ばして悩み消し去る

北野天満宮

豊川　白井信昭

み社の近く一枚田埋まりゆく住宅工事変わりゆく景色

川の辺のつらつら木槿（むくげ）つらつらに見れども飽かぬ御津の宮浦は

鉄塔を縦糸として横糸に黒き電線織りなす夕日

御所の辺のミヤギノハギは咲きをるか散りてをらむか見る人なしに

高速を伊勢湾岸道西回り新名神を一路京都へ

毎月の二十五日の縁日に市のたつここ北野天満宮

鳥居前境内の外一列に露店連なる道の奥まで

参道の門を潜りて久久に大道芸の猿回しのなか

我と妻正面に着き鈴鳴らし家族の平和と健康を願う

即位礼正殿の儀式粛粛と皇居松の間テレビ生中継

木犀の香

春日井　清　澤　範　子

十月二十二日天皇陛下即位の礼無事終りて吾床につく

台風十九号の被害はその後も続きゐて千曲川のはんらん思ひてをりぬ

木犀の香る朝なり新聞を取りに出でたる門戸を開けて

よろけゐて歩くもシルバーカー頼り七原医院と公園一周

東方公園の芝はゆくりなくバーベキューは禁止のはり紙

シルバーカーに頼りていては困ること杖にて歩く今日のリハビリ

杖つけば右手に肩に力入り歩巾小さく時はかかりぬ

吾の体は弱り行くなり日々過ぎて杖なくしては歩けざるなり

狭窄症の手術を受けて七年の夫は歩けず手術は出来ず

廊下より見る夕陽は貝塚にピタリと当り陽は傾きぬ

夫と並び歩むも夢となりしかど夫は自転車吾はシルバーカー

茗荷とり青々の茎を惜しみなく刻みて燃える袋に入れぬ

台風

東京　森岡陽子

団栗は丸や細長や形して突風にのり転がる転がる

秋気配日差しや雲や風の音山崎さんのシャンソン聞き行く

応援すチームの負けた帰り道何処からともなく金木犀の香

産直の旗が閃くトラックにお得意さんは背にリュック

子のごとく孫のごとくに育てたる愛犬テレビのクラッシック聞く

武蔵野の森の奥から野鳥の声団栗落ちるふかふか土に

台風の去って残るは暑い朝汗かき掃除散らかる落葉

道端に隠れる様に秋の花黄色紫小さな小さな

道成寺芙蓉のかんばせ玉三郎変化の姿をうちと成る也

アサギマダラ

蒲郡　杉浦恵美子

おそらくは訪ふ人もなくしかも伝西行塚は恵那山望めり
会ひたしと唐突メールのダン夫婦何時にと問えば今京都に居る
名古屋にて会ひたしと言ふダン夫婦それは困った台風接近
私なら身軽に動ける京都にて会おうよ今から電車に乗るわ
ハグなどはこそばゆい上恥ずかしいローズ放して此処は日本よ
五人の子それぞれ思ひて甚平をローズ選べり寺町通り
四歳の末娘には桜柄の浴衣選べり豪州は夏
蔵王山小雨の中を五六羽のアサギマダラが花の蜜吸う
女郎花に留まりて蜜吸ふアサギマダラ此処に居るのは全て雄とぞ
アサギマダラゆかしき名なりその羽根は慥かに薄き浅葱色して
アサギマダラ時には波に羽根休め遠き南を目指して飛ぶのか

ホトトギス

豊川　山口千恵子

庭石の脇にことしも彼岸花黄花の一本太く伸び来し
畦草を刈られしあとに地を割きて彼岸花のつぼみつくつく出で来ぬ
稲穂垂るる畦道に咲く彼岸花赤々列をつくりてをりぬ
広報紙を回覧板にはさみ入れわが組八軒の家々に廻す
回覧板月に一度廻すことわが組八軒の組長の仕事
朝ゆく堤防の道のわが前をいたちは素早く横切りてゆく
ホトトギスその茎長く伸び来たりその葉つやつや茂りてをりぬ
ホトトギスの花の模様くっきりと見ゆ白内障の手術を終へし
道畔に立てる街灯の蛍光燈同じリズムに点滅してゐる
たちまちに稲刈られたる刈りあとに朝よりの雨降り続けゐる

父母祖父母

東京　矢崎直人

前衛の画家たち描く東京の若き情熱板橋区立美術館
第一次世界大戦欧州の虚無と反省破壊崩壊
伝統を今に生かせる歌舞伎かな梅原猛小栗判官
土車曳かれし餓鬼の無念には物言えぬ者の無念重なる
照手姫歓喜の舞いに衣装かえ奇く姿は神話の名残
照手姫この世のものと思われぬさすればこそのその美しさ
場内は思いのほかの混雑や上野の森にゴッホ展来る
弟へ筆まめ手紙ファン・ゴッホ師に友に会い才能に触れ
西洋画闇の暗きは漆黒の森の怖さといづこにききし
ハーグ派と印象派との出会い受け吾が筆にする模倣の天才
今在るも父母祖父母在りてこそ感謝の心歌にしたたむ
令和からはじめてみんと詠む短歌心整へ誠の短歌

雨

豊川　夏目勝弘

天気予報百パーセント信用し明日よりの仕事の手順を運らす
繰り返へし大雨注意の放送あり海抜三十八メートルに我は住みをり
降りつづく雨音ききつつ鋸の目立ての仕上げにて一日終る
物体の総てを呑み込む濁流の画面を横目に朝の飯を食ぶ
縄文より大災害の無き地に住む今も畑より土器片が出る
傘をさし駅に向ふこと少なかり傘はカバンに入れしままなり
台風の風が雨戸を吹き鳴す闇に戦(おのの)く人びとを思ふ
一週間の天気予報かならずチェック台風の発生なきを待つのみ
生かされてゐるをつくづく思ふあり台風ことなく通り過ぎたり
収穫を終へしお米ことごとく水のなか仕方がないとツブヤク農婦

『ことよせ』

西浦公民館　いーはとぶ

天空に銀の飛行機光りつつ真青な空の今日の光よ
森　厚子

小夜ふけて満天の星スバルも光る小さき光よ小さき光よ
森　厚子

月見むと少し開けたる窓からは虫の声していよいよしきりに
山崎俊子

番号で呼び出す声に耳向ける待合室の母の小ささ
山崎俊子

「元気」かと問ひくる電話弟の短きことばにしみじみとして
三田美奈子

真清水を薩摩切子に供へたりけふはあなたの七回忌にして
三田美奈子

愛ほしと覚えし末の孫なれど今日はつべこべ屁理屈並べ
水野絹子

パソコンは遠隔操作に修理為る我にはますます不可解ＩＴ
水野絹子

わが畑の夏の野菜は終はりてもおくらは高きに日々の収穫
牧原規恵

種蒔きを終へし畑の畝の上何の仕業か大き穴二つ
牧原規恵

野良猫の振り返りつつゆく背戸の道なぜか侘びしよ夕べ暮れつつ
終夜（よもすがら）秋の夜長にすだく虫その小さき命の鳴きつぐあはれ

稲吉友江

秋にても未だ真夏日けふも続く夫はパナマ帽古きをかぶりて
ファゴットを舞台に奏でる禎（ただし）君よ聴いてゐますよ今日のわたくし

鈴木美耶子

鎧ヒバ主役に造る幹作り古典立花のこれぞ醍醐味
庭の中炭赤々とバーベキュー孫の夢かなふ盆の夜の光り

吉見幸子

手も足も腹の下へとおさめをり高温注意に蛙はぢつと
鎌たたみ布袋葵の水辺にはいつまで居るのかかまきりの夏

牧原正枝

「曲ります」マイクの声して角曲る救急車行くホームに向へり
小雨の中練習するかラリーなのか小さき爆音途切れつつ聞こゆ

石田文子

現代学生百人一首

東洋大学

無くそうと言えば言うほど隠れてく心にキズを負った人々

埼玉県立坂戸西高等学校二年　日野萌々香（ひのももか）

古文より難しいのはＪＫ語おいていかれた高校生なり

埼玉県立松山女子高等学校一年　森田七海（もりたななみ）

中東で今日も銃声鳴り響く銃を持つ子の幼い瞳

芝浦工業大学柏中学校一年（千葉県）　菅谷学毅（すがやがくき）

秋の田の稲穂は祖父のシルエット幼きあの日そこに感じる

千葉英和高等学校二年　東美緒（あずまみお）

冬の日にあなたと二人歩く夜手袋してない私に気付いて

千葉県立小金高等学校三年　大山桃生（おおやまももみ）

授業中ウトウトしている君の目は憂鬱な時間楽しくさせる

千葉県立千葉西高等学校一年　大木晴香（おおきはるか）

蝉時雨お墓の前で木霊する聞こえてますかひいおじいちゃん

千葉県立千葉西高等学校一年　佐々木萌（ささきもえ）

「あ、そう」と父のＬＩＮＥの言葉にはただ相槌怒りに見えた

千葉県立千葉西高等学校一年　府金詩子（ふがねうたこ）

贈呈誌

森岡陽子

月虹　130号

○実を拾う遺伝子ならば組換えず縄文人と語る夕暮れ　葉月ひさ子

○他愛なきことを肴に飲む夜々のあの顔あの声懐かし「花の木」　水上信子

○僧院に向かふ砂礫の山斜面火葬の石台（だい）が数多置かるる　清水和子

鹿児島アララギ　10月号

○やうやく来し岬の古墳に潮の香を運ぶ初秋の風心地よし　中山タマエ

○桜島に月が出ぬかと見上ぐれど白き噴煙が二筋三筋　中尾千賀

○雨雲か火山（よな）灰曇りか桜島を黒くおほひて夕べ暮れゆく　奥悠子

秋楡　第１０５号

○掛けられし「一片心」を酌む席に伝わりてくる亭主の情趣　不破明子
○純白の花房六つ背高く咲きてひと月旅路のかたみ　木村郁子

冬雷　11月号

○古すだれ透きて眺むる奥山に閃光はしる山裂くごとく　天野克彦
○汗垂りつつ鍬打つ畑にひびきくるひぐらしの声は涼しさ誘ふ　橋本佳代子
○碇泊灯それぞれの色に照らしをり台風逸れて沖へと向かふ　及川智香子
○白鷺の刈穂ついばむ口元に今年も稔り豊けきを知る　木村宏
○主ゐぬ隣家の軒の風鈴を律義にゆらし雨通りすぐ　田端五百子
○虎の尾のくねりて立ちて対ひ合ふ唐獅子の尾の風にさわぐも　稲田正康
○山峡の田を植ゑ終へて帰るさに草の繁みに匂ふ山百合　梶尾栄子

サンタのおじさん　ありがとう

高橋育郎　作詞

あしたは　クリスマス　イブ
うれしいな　でもね
うちにはえんとつ　ないけれど
きてくれるかな
くつしたおいて　ねるからね

きょうは　クリスマス　イブ
たのしみだ　あのね

ぼくは　いいこにしてたけど
だいじょうぶかな
こんやは　ねないでまってるね

きのうは　クリスマス　イブ
うれしいな　ほんと
つみきのおもちゃが　まくらもと
メリー・クリスマス
サンタのおじさん　ありがとう
サンタのおじさん　あいたいな

『俳句』

雨垂れはショパンの音よ実むらさき
芋の露朝の景色の澄み渡り
鴨渡る水脈の交叉の三つ四つ

松本周二

波の音聞ゆる宿や新松子
無患子を老いの手拾ふ五つ六つ
蓑虫の大葉の蓑に俄雨

田中清秀

湯畑の湯けむり染むる秋夕焼
箱根路をジグザグ上り紅葉狩
今年も又色なき庭に秋明菊

浜田紀政

重野善恵

箒目の美しき寺院や薄紅葉
家の者出掛けし夜のそぞろ寒
水道水温もり残る暮の秋

山元正規

どの指も無駄なき動き松手入
海峡の風と来てゐる小鳥かな
大刈田鳥吹かれ来て吹かれ去る

森岡陽子

銀杏散り夕闇せまる美術館
倒木の年輪数ふ台風過
腕組みて枝を見守り松手入

後の月の天辺にあり旅かばん
終生を生国にあり月天心
訪れし声ただよひ来菊日和

植村公女

津軽野の鈍行列車豊の秋
初物の林檎やつがるてふ名なる
奥津軽から木古内へそばの花

今泉如雲

自らの心のほどに温め酒
武蔵野は道を選ばぬ秋麗
身嗜(みだしな)み整(ととの)へをりぬ神迎ふ

今泉由利

杉　浦　　弘

本買ひし一生なりし秋灯
書購ふ悪癖抜けず文化の日
山茶花の切られぬ高さ匂ひけり

一茶名句集より

さむ空にはなれ〳〵や菩薩達
一人と帳面に書く夜寒かな
佛さへお留守なりけり秋日和
中々に人と生れて秋の暮
ゑいやつと活きた所かあきの暮

かさね吟行会
「東京大学田無演習林」　十月

田中清秀

東京大学の演習林は全国に七ヵ所、秩父、北海道、千葉などにある。その面積は合わせて三万二千ヘクタール余りあり、山手線内側の約五倍、琵琶湖の約半分にあたるというから驚きである。その「東京大学の森」で最小の面積を誇り都市部に位置するのが田無演習林で、今回はこの森に吟行した。令和元年十月十一日天候は曇り時々雨、西武新宿線の田無駅に集合し、バスに乗って十分ほど六角地蔵バス停まで行くと演習林の入口に到着する。

糸芒挿して六角地蔵　周二
踏み込めば森の匂いや秋深し　紀政

演習林は教育研究施設であり一般の公園ではない。武蔵野段丘の上にあり、海抜約六十メートル、地形は平坦で地質は関東ローム層に火山灰と砂礫層が重なる。主な樹木はアカマツ、コナラ、クヌギを主体に、イヌシデ、エゴノキ、ケヤキ、ミズキなどが混在しながら点在しており、植物ではヌルデ、マユミ、タラノキ、ガマノキ、スイカズラなど、さらに林床には草本類が豊富に保存されている。その広大な樹林は、今や都市林として極めて貴重な存在となっている。特に見上げる程のクスノキの大木、アカマツの古木や林立する背高のメタセコイヤが他の樹木を圧倒する存在感を示していた。

ここの見学には事前の届出が必要であり、飲食は出来ない、また、草花や木の実の採集も禁止されている。厚く保護された環境の中で、木々は鬱蒼と茂り、樹木の根方は落ち葉の絨毯のごとく柔らかく、踏み込む足は潜り込むほどである。

木の陰にかすかに揺るる秋あざみ　れい子
演習林の椅子は切り株小鳥来る　さち子

研究施設である為に、ここが東京だと言うことを忘れさせるほどの静かで、その上、樹木の香気を浴びながら小径を歩くと爽やかな森林浴の体験も出来る。また、四季折々の植物の移り変わりも身近に楽しめる。秋の紅葉だけでなく春のサクラの花見、夏はひまわりの迷路も有名だそうだ。外からの市井の騒音は全く聞こえない、ほかの来場者もほとんどいない、聞こえてくるのは鳥の鳴き声だけである。

細細し葉つぱの先に露の玉　由利
小鳥来る演習林の森深く　正規

小鳥来るは秋の季語、角川歳時記によると秋に渡ってくる小鳥たちと山から下りて来る留鳥の小鳥たちを言い、秋風を感じるある日、庭先で地鳴きをしているのに気づくと秋になった感慨とともに小鳥たちへの親しみも感じさせる、とある。いかにも秋らしい季節感のある季語で蕪村や虚子の他多くの句例も記載されている。

林の奥深くには、切り株や切り置いた材木にキノコが生えていた。キノコは栄養豊富でとても美味しいが、中には猛毒を持ったキノコも有り、食用のキノコとの見分けが難しい。昔から様々な見分け方があるが大半は迷信だそうだ。縦にきれいに裂けるキノコは食べられるとか、色柄の派手なキノコは毒がある、虫が食べていれば大丈夫など当てにならないと言う。

そして、周辺の草原にはすでに若々しいススキの穂が出揃っていた。月見には欠かせない草で秋の七草の一つでもある。その語源はすすくすく育つ草とのこと、可憐な花を咲かせるわけではないが多く詠われ、ことのほか愛されている季語である。

雨もやう朽木に生ふる毒茸　**清秀**
ひと叢の芒を囲む群れ黄花　**陽子**

多くの樹木や草花には名札が付けてある、珍しい木や判りづらい植物の表記は勉強になり散策の楽しさを増してくれる。また、幾つかの木には「科学の森・里親制」「大学の森・育成資金」の看板が見られ、観測調査や人材育成に寄付をした人の名前が書かれてある。これは演習林の様々な活動には多くの人の支援が必要であり、自身の長寿のお祝いや金婚式などの記念として寄付される人が多いらしい。社会貢献への寄付行為は有意義で良い記念になると思う。

句会は、田無駅前に戻り近くの居酒屋で美味しい昼食食べた後、そのままここを会場として提供頂いた。いつものように三句出し四句選で行い大型台風の迫り来る中、無事に終了お開きとなった。今回の珍しい演習林への吟行会の手配と案内は、浜田会員に負うこと大であり、末尾ながら謝意を表したい。

■かさね吟行会■

日時　二〇一九年十二月十三日（金）
場所　芝離宮
集合　浜松町駅ＪＲ改札口　十一時
申込　森岡陽子宛　(03)３７１２・２８３５

『酔いの徒然』（九二）

丸山酔宵子

『芭蕉と東国三社』

俳句結社「萩会」で現代の酔狂な俳人中原道夫宗匠に師事、「酔宵子」という素っ頓狂な俳号で早や10余年。毎月の句会には数十句を作っているが、大〇（おおまる）をもらえるようなチャーミングな句は、中々閃（ひら）めかない。

俳句といえば俳聖松尾芭蕉。元禄2年（１６８９）３月27日、深川芭蕉庵を出立して今年で３３０年。これを記念して「奥の細道３３０年芭蕉展」が日比谷・出光美術館で開催されている。

芭蕉は、敬慕する西行が巡った「歌枕」を自分の脚で辿り、追体験することを目的として奥の細道の旅に出る。門人河合曾良を随行し、白河の関を越へ、松島、平泉を巡り、出羽、越後・越中・加賀・越前へと旅して、９月下旬には美濃大垣へ、約６００里（２４００キロ）。行く先々で目にした自然景物を題材にした自筆の短冊や懐紙などが展示され、その滑らかな筆跡や感性に驚かされる。

「奥の細道」の2年前、芭蕉44歳の貞享4年（１６８７）8月14日、芭蕉は名月を求め、門人曽良、宗波を伴い舟で江戸深川から行徳へ。そして陸路で東国三社の鹿島神宮に参詣し、参禅の師と言われる仏頂和尚を訪ね、雨間の月見をする。これが発句7句の紀行文「鹿島紀行」。この時代、伊勢参りとともに人気であったのが鹿島神宮、香取神宮、息栖神社を東国三社と称し、伊勢参りに対し「下参り」と呼ばれていた。

古くは伊勢神宮以外では鹿島と香取だけが神宮と称している格式の高い神社で、特に鹿島神宮は古来より国家鎮護の「軍」として崇敬され、その創建は神武天皇元年（約２６７０年前）。奈良春日大社創建の際には、鹿島神宮の神が鹿に乗って奈良に至り、現在でもその鹿が「神の使い」とされている。

奥宮に向かって伸びる奥参道は鬱蒼とした巨木に覆わ

れ、荘厳な雰囲気を醸し出している。その奥宮に鹿島神宮七不思議と言われる地震を起こすナマズを抑え込むとされる「要石（かなめいし）」が賑々しく祭られていてどう言う訳か、そこには芭蕉の句碑が立っている。

枯枝に鴉（あ）のとまりけり
穐（あき）の暮　芭蕉

（注）「鴉（あ）」はカラスのこと
「穐（あき）」は秋のこと

長年俳句をいじってきていますが、基本的な事を解っていないことが良く解りました。まだまだ精進が必要であります。

それでは僭越ながら、天高く澄み切った空の下、余りに神々しい鹿島、香取、息栖の東国三社を訪ねて、恥ずかしながら一句、

秋の天（そら）鹿島香取に息栖なり
酔宵子

楽しい時間　85

山本紀久雄

２０１９年10月31日

神にならなかった鉄舟・・・その十五

結城素明は画家であるが本を7冊出版している。『東京美術家墓所考』（昭和6年）『勤王書家菊池容斎の研究』（昭和10年）『東京美術家墓所誌』（昭和11年）『伊豆長八』（昭和13年）『行誠上人遺墨集』（昭和16年）『勤王書家佐藤正持』（昭和19年）『芸文家墓所誌』（昭和28年）。ジャンルは墓関係が3冊、勤王書家が2冊、その他の偉材2冊。

このように精力的に出版をしている画家は珍しい。何かを持っている人物と考えられ、それが『江戸開城談判』の海舟刀の位置に関係がある可能性も考えられるので、まず、『東京美術家墓所誌』（昭和11年）から検討してみる。

この書の序文には次のように書かれている。

《物には本末あり、事には終始あり、先後する所を知れば、則ち道に近しといふ。曩（さき）に余が東京美術家墓所考（昭和6年）を公にせしは、一に此の事を心して、古の名人練達の士天下に明らかにし、以て現代の芸苑に対し、自ら顧て新芸術の領域を開拓せんと欲したるのみ。然るに客歳（かくさい）（去年）帝国美術院の改組に端を発し、芸苑未曾有の不祥事あり、而して温故知新以て師となすべき事を忘る。余が再び秀筆を呵して、物故美術家を供養記念せんと欲するに至りたるの真意、実に茲に存せり》

誠に立派な出版意図と評価したい。

続いて凡例に下の注記がされている。

1　本書には、東京に在住したる美術家並びに美術関係者の墓所を、地域別、寺院別、墓地別に排列して、その没年、行年、法号、略伝及び墓石の現状等を略述した。

2　本書に記載せる墓所は、最近著者が殆ど実地に掃苔供養したるものにして、その調査事項は、墓石、墓標、又は過去帳等に基き、不備の点は、諸種の史料或は識者の垂教によりて之を補えり。

ここで素朴な疑問が浮かぶ。そもそも画家が墓所について、このような調査を行い、それを出版するものであろうか。

その疑問に対して、『続山河あり』（平泉澄著　立花書房昭和33年）が、昭和28年出版の『芸文家墓所誌』を次のように評価している。

なお、平泉澄（ひらいずみきよし）（明治28年（１８９５）‐昭和59年（１９８４））とは、歴史学者で専門は日本中世史。国体護持のための歴史を生涯にわたって説き続けたことから、皇国史観の代表的な歴史家といわれており、彼の歴史研究は「平泉史学」と称されている。

《昭和28年に出版した『芸文家墓所誌』に至って、地域の上では、北海道から九州まで、広く全国に及び、人物の方も、ひとり書家に限らず、尾崎紅葉・森鴎外・夏目漱石・幸田露伴・西田幾太郎・河竹黙阿弥・伊井蓉峰・犬養毅・ケーベル・フェノロサ等の文学芸術に関係ある人々を網羅し、総計１１７２名に上っている。しかも、それは、只其の墓所を記すのみでは無く、生れた年を記し、生れた所を述べ、略伝を附し、著書を挙げているのである》

《私は本書によって、多くの事を知った。就中、大東亜戦争の最中、及び戦後の数年間は、戦雲に包まれ、戦敗に禍されて、動静も分らず、訃報も知らずにすごして来て、本書によって初めて其の不幸を知った人々も少なく無かった》

《本書は、名は墓所誌であるが、実は人名辞書であって、今後人名辞書を作ろうとする者にとって、極めて便利な手引きとなるものといふべきである》

《一体かういふ事は、歴史家の当然つとむべき仕事である。しかるに歴史家数多くありながら、誰も誰も之を等閑に付して顧みないのを、却って書家である結城素明書伯が、書筆の余暇を以て之を企て、綿密に調査し編術せられたのを見て、私は慚愧と感謝とこもごも到らざるを得ないのである》

ひとつの事例として『東京美術家墓所誌』に記載された、鉄舟から影響を受けた九代目「市川團十郎」から紹介する。

《市川團十郎（俳優）赤坂青山南町　青山墓地（神式）

本名堀越秀、天保九年十月七代目団十郎五男として築地に生る。五歳初舞台、明治七年九世団十郎襲名、稀世の天才を発揮し創作に所演に、往くとして可ならざる無く、正に劇聖の名を辱めぬ不世出の団十郎と称せらる。大正七年九月浅草公園に新海竹太郎作「暫」の銅像成り其銘並序の撰文は森鴎外、書は中村不折なり（戦争で応召）。昭和二十五年九月文化切手発行され、同十一日嗣三枡の「九代目市川団十郎」上梓さる。明治三十六年九月十三日没享年六十六。（下の写真）》

では二世五姓田芳流について『芸文家墓所誌』はどのような記述をしているか。

《五姓田芳柳（画）白金三光町　専心寺墓地　名は子之吉、二代芳柳を継ぐ。昭和18年1月19日没享年80。同螢に初代芳柳の墓あり》

これだけで、誠に記述が簡単である。ところが、初代芳柳が記された『東京美術家墓所誌』を見ると詳しく書かれている。要点のみ紹介する。

《紀州藩士浅田富五郎の男、本多、猪飼、津田、森田の四家に養はれ、五姓の祖先を祀るの意より自ら五姓田と称すと言ふ、書を井草国芳、樋口探月に学び、又長崎に於て和蘭書を見て洋風の一派を創始す》

この後に墓石に刻した内容の説明が続くが、二世五姓田芳流と比べて格段に詳しい。ここから推測すると、素明は二世五姓田芳流をあまり重要視していなく、それほど意識もしていなかったと思われる。

さらに忖度すると、二世芳流から提示されたに『画題考証図』についても深く考察しなかったのではないか。つまり、海舟の刀に位置など、どうでもよかったのではないかと思われるが、このところは後日、もう少し深く検討したい。

絹の話（109）

「アトリエトレビ」今泉雅勝

絹の考古学入門（その4）

絹と殉死

殉死とは

王や后妃、諸侯、諸侯婦人などの権力者が亡くなったとき、寵臣や側近、寵妾（ちょうしょう）、愛婢（あいひ）、多くの奴婢達が王の墳墓の陪葬坑（ばいそうこう）に自主的又は命令で葬られる事を言うのです。が、王が亡くなってから幾多の儀式などを経て壮大な墳墓に葬られる迄に長い時間がかかると思われます。寵臣達はそれら諸般を一切すませて自ら陪葬坑に横たわるのか、他所で静かに自害して葬ってもらうのか歴史は語ってくれません。殉死を命じられた側近の兵や員数合わせの奴婢奴隷達の気持ちはいかばかりか心が痛みます。

殉死の風習が起こって来たのは中国の東周の時代以降の春秋戦国の時代から秦に至るまでの紀元前７００～約７００年間のようです。日本でも規模や形式は違っても、明治の時代になっても殉死と云う風習は残っていました。

時代背景

中国山東省の東周期とは青銅器から鉄器に移り変って行き、鉄と云う新しい文化に触発され、諸国の王が覇を競う戦国時代への移行期でありました。

南から伝わって来た絹の生産が北東中国でも盛んになって来た時代で、絹はまだまだ未精練や無撚糸の紬の様な素朴な織物が主であったと思われます。この時期、絹の製糸技術（特に撚りをかけた細い糸がつくられ始める）が急速に発展しはじめ、絹は権力者にとって自ら装って権力を誇示する絶好の品であるばかりか、周辺諸王との外交の重要品目として重視され始め、家臣に下賜する効果的品でもありました。後世絹は臣下への給与の一部になって行くのです。

出土品から推測

当時の出土品に、銅壺に鋳出された「躬桑礼（きゅうそうれい）」の図柄の物があります。それはその年最初の春蚕（はるこ）を飼いはじめる為の桑摘み儀式の図柄で、后妃、諸侯婦人も蚕母（宮中で養蚕に携わる女性）や蚕婦（諸侯の元で養蚕～織布に携わる女性）達と一緒に桑摘みをしている様子を現わしものです。これは宮廷や諸侯の間で養蚕が盛んに行なわれていた事を物語っています。

そんな時代の古墳から蚕形玉髄（ぎょくずい）が発掘されました。これは蚕母、蚕婦達の養蚕、製糸、織布技術が向上するように権力者が高価な翡翠で作らせた蚕型の装飾品で、常に腰から両方の太もも付近に紐で向かい合わせの対で吊下げていたと思われます。

彼女達は常にこれを履き、国の盛衰を賭けて細い糸作りと薄くてよりしなやかな織物を作る事を求められていたのでしょう。艶々して、薄く、しなやかな絹織物は、国威示す象徴的な物になって来ていたのです。

蚕母、蚕婦の殉死

王、が亡くなると、ここで働いていた大勢の中から15才～30才くらいの若い女性の幾人かが、命により蚕形玉髄（玉蚕）を佩き、王の墳墓の陪葬坑に葬られたのです。

いずれの玉蚕も出土部位の骨格の腿（もも）から足の傍で発見されています。王の墓からは絹織物、絹糸束、錦など残りにくい絹製品が沢山出土していますが、残念ながら陪葬坑には骨と玉蚕しか残されていません、坑の作り方によって絹は早く分解して残りにくいので、彼女達の装束はどのようであったか分かりません。何も衣類の痕跡が残っていないとしたら、絹を着せてもらってあの世に赴いたと思われます。彼女達はどんな風に葬送されたのでしょう、哀しむべき事と云う他はありません。

殉死の背景考察

この墳墓は紀元前４００年頃のものではないかと推測さます。これから後、絹の利用範囲は寒さを防ぐばかりでなく鉄の武器（鏃（やじり）など）ら身を守る事が出来る有効な機能が認識されはじめ、諸王は競って絹の増産に励むようになりました。特に北東中国では北方異民族が西進、南下を繰り返すようになり、その防備に異民族に負けない強い大兵団を組織する必要に迫られていました。増産される絮（じょ）（絹綿）を兵に支給し防寒防弾着をつくらせたのです。絮衣は軽く、兵の戦闘能力を増大させたばかりか、馬への負担を減らし、絹の抗菌性等の機能性により外傷ケアに効果があり、皮膚疾患の予防にもなって『絹は力』となってゆくのです。

村役人は各戸を回って養蚕を薦め、緜（めん）（高級な真綿）絮（低級な真綿）と織物を厳しく取り立てる様になりました。こうして絹は鉄と共に国を富ませ強くする、表裏一体の新しい産業として歴史に登場して来るのです。

富国強兵

日本でも大化の改新後の7世紀中頃、朝鮮の白村江の戦いに出兵した兵士に緜甲（真綿を固く加工したもの）と絮衣を着せたといわれています。

昭和の初期には絹が日本の輸出総額の45％前後となり、富国強兵の国策を支えたのでした。

「江上浩二の独り言」24

江　上　浩　二

ノーベル賞学者は本を読まない

２０１０年12月18日にマイブログに寄稿したものを自分の引き出しから、忘れていたものを取り出すことが出来た気持になった、今日令和元年11月９日である。

なんでこんなテーマを取り上げたのか、理由があって、あるシニアの会合で、知り合いに誘われ最近読んだ本の内容でも紹介してくれというものだったが、私は若い時から本は読んでもその冊数は極めて少なく限られていて人に口外できるようなものでなく、いっそのこと本を読まない江上で通そうともっていた位であった。毎年この10月―12月となると、私には関係ないがノーベル賞シーズンでメディアは騒がしくなる。

この話題も先日頂いた日本出版クラブの発行する出版クラブ便り（２０１０年12月号）の中からの紹介です。

http://e-bbb333.com/data/pub060.pdf

> 全ての分野のノーベル賞受賞者が読書をしないとは思いませんが、執筆者の志村幸雄さんによれば、紹介されている理論物理学者の朝永振一郎さん、アインシュタインは典型的だったようです。本当に世の中の新しい事を編み出すには、余計な雑音は不要かと思いますが、読み書きの基本では、普通の本程度のものは、ある年齢で目を通されたとは思います。
>
> しかし、ここで話題とする読書は自分の論理、創造をする際、凡人だとそのほとんどを引用しながら、ついつい自分の考えだと重複して信じ込むことが多いのですが、流石、奇人に近そうな理論物理学者は他人の考えを参考だにしなかったようです。

一つ非常に気になった処は、アインシュタインが物理学の実験を思考実験として行っていたのではないか、それはコンピュータもない時代に自分の頭で実験のシミュレーションをやってのけていたという点です。

以前、文盲だった姜尚中氏の母親を描いた〝オモニ〟（集

英社）を読んだ印象を9月25日のブログに書きましたが、
http://e-bbb333.com/tripleB/2010/09/25/

> オモニが晩年亡くなる前にビデオテープに吹き込んだ息子への長い喋り言葉は、一度紙面に文字を書きとめて推敲など出来ないオモニが、絶対、頭の中で瞬時に推敲作業をしていたに違いないと私の〝推論〟を短く記しておきました。
>
> アインシュタインは自分の頭で実験のシミュレーションをやってのけた事が、このオモニの〝推敲〟されたい違いないビデオテープに吹き込んだ喋りと重なったのです。
>
> アインシュタインもある種の現代人が使う文字、言葉に対して〝文盲〟で、それらは自分の想いを描くには足らず、頭の中に描いた動的映像の様なものを、最低限の数式で描かざるを得なかったと思っています。
>
> 古い時代、文盲であった語り部さんが空で覚えている長い長い喋り言葉も、ある種の頭の中で知らずのうちにやっているだろう〝シミュレーション〟があると思うようになりました。

最近、近くの児童館で絵本の読み聞かせをしている先生に教えて頂いた事も強く印象に残っています。まだ、字を知らない小さい子供（2-4歳ぐらい）は、絵本の中に描かれている絵を、われわれ大人が注視もしないような細部まできちんと見ていて、それを後で、先生、あのお姉さんが着ていたエプロンは皆、色が違っていたねと。登場する同じ図柄のエプロンが実は目立たない色ですが、それぞれ（4種類）違っていたのです。大人は見過ごします、それを子供たちは見分けていて、絵本のストリーを大人以上に楽しんでいたのです。

単なる情報、知識を漫然と増やす読書でなく、楽しめる〝本〟であって欲しい。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本　田　勇　気

２０１９年11月5日

内臓の負担を減らす

先日　気季節外れの黄砂が飛来し
鼻水
くしゃみ
眼の痒み
咳
熱っぽさ
などの症状が出た方がいたのではないでしょうか?
寒暖差もありますので
寒暖差アレルギーなどの症状も出たりなど
内臓などに負担がかかります
少しでも内臓の負担を減らすために

夜の食事を極力早めにし
なるべく睡眠まで3時間は空けましょう
中々難しいですが
それ以外ですと
湯船につかり内臓の血流をつける
ゆたぽんの位置をおへそ中心から　みぞおち中心に
もってくる
腹巻きを着ける
なども試してみてください
睡眠時に消化吸収させるのではなく
修復させるようにしてあげると
アレルギー以外にも
朝起きた時の怠さや朝食の感じも変わってきますよ

２０１９年11月13日

身体を冷やさない様に

気温が下がりますと
朝の空気が澄んでいて
寒いですが気持ち良いですね
朝起きた時に首が回らない
背中がつる
ふとした時に腰がギクッとくる
といったギックリ系もどきが流行っています
本来この時期はそれほど出ないのですが
寒暖差や台風による気圧の影響が大きいのかもしれ
ません
前回も書きましたが
身体を温めること　睡眠をとること
がとても重要です
寝る時など厚めの掛け布団や温かい敷きマットなど
もう少し寒くなるまで待とうとか
まだ早いかな？
という考えは止めて
寒いなと思ったら直ぐに温かい物へ変えて下さいね
暖房器具もしかりです
身体を冷やさない様にしていきましょう

漢詩研修（三十八）

千代田岳精会　平井茂行

春日（しゅんじつ）家（いえ）に還（かえ）る

正岡子規（まさおかしき）作

車（くるま）に乗（の）り馬（うま）に騎（の）って早（はや）く帰（かえ）り来（きた）る
一（ひと）たび双親（そうしん）に謁（えつ）すれば喜（よろこ）び自（おのずか）ら催（もよお）す
処処（しょしょ）鶯（うぐいす）啼（な）いて春（はる）海（うみ）に似（に）たり
故園（こえん）の芳樹（ほうじゅ）吾（われ）を待（ま）って開（ひら）く

【作者】正岡子規《一八六七（慶応三）年～一九〇二（明治三十五）年》明治の俳人、歌人。本名は常規、幼名処之助、後に升。子規は号。父は正岡隼太。松山藩御馬廻加番だったが、子規が五歳のとき没し、子規は母の手で育てられ寺子屋に通い、漢学を祖父大原観山に、書を伯父佐伯半弘から学んだ。十一歳のときから漢詩を作り始め、松山中学を中退、東京に遊学、神田共立中学を経て、一ノ橋大学予備門（第一高等中学校）に入り、ここで、夏目漱石を知った。明治二十三年、東京帝国大学国文科に入った。『俳句分類全集』（明治二十四年～同三十四年編）の編纂を始め、日本新聞社に入社。下谷上根岸に家を持ち、家族（母と妹）を迎えた。明治二十八年三月、従軍記者として日清戦争に参加して、ふたたび喀血、帰還して神戸・須磨・松山で療養。同年十月、東京に帰った。病床にありながら雑誌「ホトトギス」の基礎をなす俳句革新を仕上げ、高浜虚子と河東碧梧桐を育て、のち「アララギ」派をなした伊藤左千夫ら、いわゆる岸根派の歌人群を導いて、和歌革新の一大勢力をつくりあげた。着実な万葉集的写実主義を標榜し（いわゆる「写生」の説）、それは長く近代短歌の根幹をなすに至った。明治三十五年九月、わずか三十六歳で没する。

【解説】春の日、久方ぶりで両親のいる家に帰り、その喜びを詠じたもの。明治十二年（一八七九）、作者十二歳のときの作である。

【語釈】※双親・・・父母。なおこの詩は課題作であるから、父母を出したが、子規は五歳で父を失っている。※自・・・自然と。※処処・・・あちらでもこちらでも。ここかしこ。孟浩然の「春暁」に「処処聞啼鳥」（処処啼鳥を聞く）とある。※春似海・・・春の草花が風に揺れ、波打っている様子を海にたとえたもの。※故園・・・ふるさと。※芳樹・・・花の咲く樹。

【通釈】車に乗り、あるいは馬に騎って、急いで家に帰って両親の顔を見ると自然と喜びが湧き上がってくる。帰りの道々、また、家の回りの到るところに鴬が啼いて、目に映る春の様子は海にも似て爛漫である。ふるさとのわが家の木々が、自分の帰郷を待っていたかのように花を美しくつけている。

『伊勢神宮　西行と芭蕉の足跡』

中屋保之

《「お伊勢さん」「大神宮さん」と親しく呼ばれる伊勢神宮は、正式には「神宮」といいます。神宮には、皇室の御祖先の神と仰ぎ、私たち国民の大御祖神として崇敬を集める天照大御神をお祀り内宮皇大神宮と、衣食住を始め産業の守り神で豊受大御神を外宮（豊受大神宮）と、十四所の別宮、四十三所の摂社、二十四所の末社、四十二所の所管社があります。これら百二十五の宮社全てをふくめて神宮といいます。内宮は約二千年、外宮は約千五百年の歴史があります。》（伊勢神宮ＨＰより）

その面積は約五四五〇ヘクタール、伊勢市全体の森林の約半分を占めるという。

歴代天皇として初めて神宮に「御参拝」された明治天皇の御製には、

とこしへに民やすかれと祈るなる　わがよを守れ伊勢の大神

と、明治帝の民草を慈しむ心情がみてとれる。また、次の二首に、日本語の美しさを感じるのは伊勢神宮の荘厳さと相俟ってのことであろうか。

五十鈴川清き流れの末汲みて　心を洗へ秋津島人
国民もつねに心をあらはなむ　御裳濯川の清き流れに

さて、伊勢神宮に対して信仰心が厚かったと云われる西行は、たびたび神宮に参拝しているが、その最初は出家後間もない頃のことだったと思われる。山家集に、その折の気持を歌ったと考えられる歌を残している。

「世を遁れて伊勢の方にまかるけるに、鈴鹿山にて
鈴鹿山憂き世をよそに振り捨てて　いかになり行くわが身なるらん」

とあるように、いざ出家したはいいが、思惑通りに心の平安が得られるものかと不安を吐露している。

また、西行は初めて伊勢神宮に参ったときの新鮮な驚きを

「大神宮の御祭日によめる
何事のおはしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」

と詠んだと伝えられるが、西行本人の作かは定かではないという。が、今様にいえば、伊勢神宮のキャッチコピーとして一

流であろう。

松尾芭蕉にとって西行は、最も敬愛する師の一人である。新古今和歌集に最も多い九十四首が入る西行に近づき、迫ろうとして、お伊勢参りを繰り返したのかもしれない。出生の地である伊賀上野から神宮までの伊勢街道が既に整備されており、郷里滞留中にも何度かは参詣していたようである。

そんな伊勢神宮は、芭蕉にとって、必ずしもウエルカムな神社ではなかったらしい。貞享元年（一六八四）八月二十日、十日間ほど伊勢に滞留した際の様子を「野ざらし紀行」で、

《松葉屋風瀑が伊勢に有けるを尋音信て、十日計足をとゞむ。腰間に寸鉄をおびず、襟に一嚢をかけて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵有、俗にゝて髪なし。我僧にあらずといへども、浮屠の属にたぐへて、神前に入事をゆるさず。云々》

俗人のようでいても髪を結わない者は僧侶の仲間と見做され神前には入れてもらえなかったと嘆いている。芭蕉は西行同様剃髪していたのである。

元禄元年（一六八八）、笈の小文の旅での同伴者である坪井杜国と落ち合うため赴いた外宮の館で、涅槃像を拝す好運に遭遇した。

神垣やおもひもかけずねはんぞう

この日、二月十五日は釈迦如来入滅の日で、各寺院がその像（絵）を掲げて弔う。芭蕉は図らずも、しかも外宮の館での拝観が叶った。芭蕉の感動、驚愕の句である。

『伊勢神宮参詣　松尾芭蕉と西行法師』の著者恒松侃氏は、「伊勢神宮への熱い信仰心を持ちながらも、法躰人（僧侶）的出立である為、神前に近づく事が許されなかった松尾芭蕉が、何故に六回以上も伊勢参詣を行ったのであろうか。勿論それは伊勢神宮に対する松尾芭蕉の信仰心の厚さによるものであろうが、伊勢神宮参詣の最大の原因は、西行法師との関係にあったのではなかろうか」と記している。

芋洗ふ女 西行ならば歌よまむ（野ざらし紀行）

西行の草鞋もかかれ松の露（笈日記）

芭蕉は、西行が大好きだったようである。

（参考文献　恒松侃著『伊勢神宮参詣　松尾芭蕉と西行法師』 Wikipedia など）

越州吟行(えつしゅうぎんこう)

横山精真

長岡(ながおか)に吟(ぎん)じて得(え)たり大臣(だいじん)の杯(はい)
美酒(びしゅ)は呑(の)むべし筵(えん)開(ひら)くべし
春日山城(かすがさんじょう)　朗詠(ろうえい)頻(しき)りに
姫川(ひめかわ)の秋(しゅう)　興(きょう)旅情(りょじょう)　催(もよお)す

越州吟行会
長岡吟得大臣杯　美酒可呑筵可開
春日山城頻朗詠　姫川秋興旅情催

※令和元年十月六日、岳精流日本吟院は糸魚川教場訪問を兼ね、国民文化祭「吟舞の祭典」に参加。私は前泊し、リハーサルに立ち会い、夜は一足早い三河岳精会の宴会に伺った。
　大会は五人合吟でのコンクールに三河男子が三位「長岡市長賞」本部女子が優勝し「文部科学大臣賞」を獲得する。その日は七百名参加の大パーティーに本部と三河は夕食会を兼ねて参加する。翌日は市内の山本五十六記念会館を訪ね、西に向かう。昼食場所で再び三河と合流し春日山を伺う。
「九月十三夜陣中の作」「春日山懐古」など到る処で吟声上がる。ここで三河と別れなければならない。
　深浦会長に別れのご挨拶をお願いし、私は会詩を合吟したくなった。
「真善美」「会詩」を先導し合吟している中、何とも言えない気分になった。吟じ終わって、何の打ち合わせもなかったがいきなり「万歳」をすると全員が声を合わせて三唱となった。気持ちは皆同じで通じ合えた事が嬉しかった。三河と別れて姫川に向かう。沿道にススキが豊に穂を垂れていた。こちらはすっかり秋だ。「国富翠泉閣」に着くと別室で糸魚川教場の審査を行った。会詩を見事に吟じてくれた。新潟支部も合流し最後の宴会となる。初めての吟友も「百年の知己」を実感した事だろう。又、意義ある吟行会となった。

萬葉秀歌の鑑賞

津之地直一

しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは着ねど暖けく見ゆ

白縫　筑紫乃綿者　身著而　未者伎襴杼　暖所見（③三三六、沙弥満誓）

（口訳） 筑紫産の綿は身につけてまだ着ないけれど暖かく見える。

沙弥（サミは梵語）とは男子の出家して十戒を受けた者の称。満誓は俗名を笠朝臣麿と言い、養老七年、筑紫の観世音寺造営の長官として九州に下った。「しらぬひ」は筑紫の枕詞。「ぬひ（縫ひ）」（四活連用形）の「ひ」は甲類だから、「不知火」（火は乙類）と見るのは誤になる。「領らぬ霊（憑く）」と見るのが当る。綿は「もめん綿」ではなく繭からとった綿、即ち「まわた」である。形容詞「阿太々介志」の例は新撰字鏡にある。この歌三四句あたりに何となく官能的語気を感ぜさせる所から、女体と関聯させた寓意説（攷証）等も出ている。これに対し「うち見たるままに心得べし」（考）としたり、「比喩的に相聞の心をこめたものと見るのも、また一つの見方で自由である」（私注）としたり、「またその見方を作者は微笑してうなづくであらう」（注釈）等とその辺の鑑賞はかなり自由のようである。

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も吾を待つらむぞ
憶良等者　今者将罷　子将哭　其彼母毛　吾乎将待曽（③三三七、山上憶良）

（口訳） 憶良はもう御免蒙ってお先に失礼いたしましょう。家では子供が泣いていましょう。（そして、また）その子の母も私の帰りを待つていましようよ。

「山上憶良臣罷レ宴歌」と題詞がある。恐らく、筑前守時代の作で、大宰府あたりであつた宴飲の席での詠であろう。「憶良ら」の「ら」は複数を示すものでないいい例である。「罷らむ」は動詞「罷る」の未然形「罷ら」に助動詞の「む」のついたもので、下の「泣くらむ」「待つらむ」の「らむ」（推量の助動詞）とは意味を異にする語である。第四句は「ソノカノハハモ」（「彼」の字を「被」の誤字と見る――古典大系）等とも訓まれているが、「其」を「ソレ」（副詞）と訓む新訳（武田博士）の説に従いたい。一首、音調としては「らむ」が三回も繰返され、ラ行音多く、二句三句五句で切れて、誦詠にも叶った歌である。然し人麿作の如く、一首連綿と流動して行くと言ったところはなく、多い句切れは又訥々とした屈折感をを与える。内容は決して浮薄でなく、その実質的人間的な語気は吾々の心を打つものを持っている。妻子を愛し、酒に専なることの出来なかった老儒、道学者憶良の生真面目が性格が覗われる。真淵は「かく戯れいひてその席を立ちけむさま思ひやらる、かたくて且おもしろき人と見ゆ」と言っている通り、宴席に出席しても宴半ばで中座し、その妻子のもとへ直行しているのであって、ましてや、友の声に呼び合って二次会などに行くような人物ではなかった彼憶良の面貌がまざまざと浮かんでくるような歌である。

雨（2）

夏目勝弘

長い間短歌を、作り続けていると、思ったこと、目に見えたものを文字に書くと、自と短歌の形になってしまう。

日々の生活が、惰性に流れてしまうように、短歌もまた同じである。

もう一度、原点にと思い、万葉集、アララギの先達たちの歌集を、読みかえしてみた。

「雨」の作品をかきだして、初句、二句、三句、結句の順に書いてみた。俳句も短詩形なので、参考になるかと思い、記入した。

初句
○雨晴れて清く照りたるこの月夜また更にして雲なたなびき（万葉集八－一五六九）
○雨にぬるる廣葉細葉の若葉森あが言ふこゑのやさしくきこゆ（赤光　斉藤茂吉）
○時雨早きこの丘のいづちに足の痛み知り始めしや六十に近づく憶良（続々青南集　土屋文明）

二句
○我が欲りし雨は降り来ぬかくしあらば言挙せずとも年は栄えむ（万葉集　大伴家持）
○しろがねの雨わたつみに輝りけむり漕ぎたみ遠きふたり舟びと（あらたま　斉藤茂吉）

三句
○衣手の名木の川辺を春雨に我立ちぬると家思ふらむか（万葉集巻九－一六九七）
○冬牡丹萌ゆる紅（くれなゐ）にそそぐ雨おぼろに遠きひとを恋ひ来て（青南集　土屋文明）
○冬服をはじめて着たる日は寒く雨しとしとと降りつづきけり（あらたま　斉藤茂吉）

四句
○我が背子が宿のなでしこ日並べ（ひならべ）雨は降れども色も変らず（万葉集二十－四四四二）
○遠々（とほどほ）来ませる君を伴ひて終日（ひねもす）の雨山のつばくらを見る（山の間の霧　土屋文明）
○小さなる山中の家きのふより雨みだれ降れ家うごかして（つきかげ　斉藤茂吉）

結句
○君があたり見つつも居らむ生駒山雲なたなびき雨は降るとも（万葉集十二－三〇三二）

俳句には季語があり、作り易さがある、反面思いを籠めることがなかなか出来ない欠点もある。

短詩形における思の表現は、俳句においても短歌においても同じであると思う。

俳句

春の雨
○春雨や蓬をのばす草の道（芭蕉）
○琅玕の竹春雨の樋となりぬ（山口青邨）
○寺に入れば石の寒さよ春の雨（高村光太郎）
○少年のかくれ莨（たばこ）よ春の雨（中村汀女）

夏の部
○五月雨や鳰の浮巣を見に行む（芭蕉）
○樟の瘤累々梅雨の旱なり（根岸善雄）
○青梅雨の墓場を通らねばならぬ（岡部弾丸）
○百姓に泣けとばかりに梅雨旱（石塚友二）
○泣かれては泣かざるまでや虎の雨（中村草田男）

秋の部
○秋雨や水底の草を踏み渡る（蕪村）
○秋雨やともしびうつる膝頭（一茶）
○母の忌や秋雨降りて小豆煮る（赤星水竹居）
○紫陽花や青にきまりし秋の雨（正岡子規）

冬の部
○冬の雨柚の木の刺の雫かな（蕪村）
○面白し雪にやならん冬の雨（芭蕉）
○子なき友いま冬雨の紐ながし（飯田龍太）
○煙突の煙棒のごと冬の雨（高浜虚子）
○水漬きつつ木財は青し冬の雨（中村汀女）

御降（おさがり）
○おさがりや十日の雨の降りはじめ（晩山）
○御降の雪にならぬも面白き（正岡子規）
○野社へお降り霽れや夕まゐり（飯田蛇笏）

「氷魚」のことから（227）

岡本八千代

令和元年十月二十二日、天皇陛下即位の礼正殿の儀が厳かに行われた。私が日本人の一人（ひとり）であることに自然と涙したほどであった。

しかし、この伝統的な美しい島国に去年から今年にかけての災害に、人間の力ではどうすることも出来ない自然の恐ろしさに感慨無量の思いになりつつ。―。

令和元年十月十二日の勇敢に「『文学なき国語教育』が危うい」（文学界9月号の目次）と載せられていた。また「短歌は精読すれば非常に論理的に作られていることがわかる」とも書いてあった。また、「現代の国語」にあてられた『話すこと・聞くこと・書くことが足りていないというもの、短歌を実作し、それぞれの歌を評し合えばいい。これは歌会言い、歌人が千年以上も昔から行っていたことだ。』とも載っていた。これは「短歌を掴（つか）む」と題して、歌人の佐佐木定綱氏が載せていた。

これを読んで私自身、思うことと同感であったので、この紙面に書いた。

私の持っていた斎藤茂吉カレンダー昭和62年の「茂吉四季折々の詩」が出てきた。

「紅蕈能雨爾奴礼由久阿波礼佐乎
　人爾知良江須見都々来仁計里」

と、歌集「赤光」には「木の実」と題して大正元年正月元旦に歌った。茂吉の歌。

このカレンダー色紙として切れば十二月まであるので、私は急に嬉しくなってしまった。

カレンダーに載っている茂吉の歌、続けて二月の歌から書いてみよう。

〃ゆふぐれのう寿あ可りにも雪の間能
　土黒々し冴え可へり能ゝ〃

これは第九歌集「石泉（せきせん）」所載の歌。昭和六年作、「この日ごろ」八首中の四首目に収録されている。

茂吉はこの時、五十歳に当たり、年頭に「おのづから心つかれて我は居りわれに五十の年明けにけり」の歌もあり日常生活も歌っていて、親しみやすい人間茂吉が私には感じられる。

三月号の歌

〃陸奥乃蔵王山竝爾ゐる雲能比ね毛須
　動き春たつ良し毛〃

これは、第十四歌集「霜（しも）」所載の歌。「霜」は、昭和十六年と還暦を迎えた昭和十七年の作品八六三首を収めた歌集。茂吉は、昭和十五年に「柿本人麿の論考を完成したり、人麿の重厚で沈痛な声調に傾倒していたと言われている。

この歌の意味は、「みちのくの蔵王山に連なる山脈の上にたむろしている雲が、一日中移動しているのがみえる。それから推しはかるともう春になったことだなあ。」という淡々とした気持ちが、もう調べとなって人々に豊かで蔵王山を彷彿させる歌だと言われていたらしい。いいカレンダーが出てきて嬉しかった。

次は四月カレンダーへ。

編集室だより【二〇一九年十月】

今泉由利

○駒場公園へ、俳句の吟行。
学生時代は、久我山の家で暮したから、井の頭線に乗ると古里に帰ったような気持になる。東大構内の公孫樹並木の、恰も銀杏の落ち敷く道をここの落銀杏は、とても小さかったから、栽培種ではないな…と思う。原種に近い銀杏を拾いたかったけれど「かぶれ」体質故、必死にあきらめた。
加賀百万石を偲ばせる、前田侯爵邸におじゃまして、しっくりと、ゆっくりと、昔のなかに入ってゆく心地。おとなしく滞在出来る部屋が用意されてあったから、加賀百万石に浸った、句作した。

○大手町日経ホールへ。明治大学OB交響楽団、リチャーズのア・ラ・カルト。ドヴォルザークの管楽セレナーデ「ニ短調」。コミカルな感じだったり、知っているメロデーがうれしかったり。
千代田フィルハーモニー管張楽団。ウェーバー、歌劇「魔弾の射手」序曲。ドヴォルザーク、交響曲第八番。様々な楽器、五十人程の楽士さん達の造り出す音響。身も心も、新しくなってゆくような心地良い時を過すのでした。

○宮城県の友人から、収穫されたばかりのお米が届く。長い間の外国生活で、新米という贅沢は〝伝え聞くもの〟だったのに、さっそくつやつや、ふっくら、ご飯とはこんなに美味しいものと知る。そして、もっとすごい。一緒に、伊達政宗の漢詩、馬上少年過　世平白髪多　残軀天所赦　不樂是如何　の書に包まれた〝笹かまぼこ〟をお届け下さった。政宗の漢詩を、大声で吟じています。

○日本野蚕学会副会長、今泉雅勝氏の「絹の話」絹の機能性…の勉強会へゆく。

・絹を作る生物は、地球上に十万種類以上生息していると云われていること。
・何時の時代に、どの様な目的で、どの様に利用されてきたか。
・絹が持つ、驚くべき機能性を知ること。
・機能性が次第に解明され、衣料品ばかりではなく、健康維持目的の食品、化粧品、インターフェロンなどの薬品製造に寄与して「絹と健康」が注目され。
・「絹の来た道、これからの道」
・自身、直接肌にあたるところは、絹のものを着るようにしている。
・テキスタイルを専攻、織、染、テキスタイルデザイン画、全部のことを一人で熟（こな）すつもりで外国に出掛けてゆき、出来なかったことばかりになって帰ってきて、また、はじめから挑戦したい気持になってしまった。

野菜・まんだら　（22）銀杏。公孫樹。鴨脚樹
Ginkgo　biloba

○イチョウ科　イチョウ属

○2億年まえの下等植物の唯一の生き残り。

○イチョウがはじめて地球上に現れたのは約3億年前とされ、アパトサウルス、ディプロドクス、草食恐竜の食糧だった。恐竜に食され、糞と一緒に種が残ることで繁栄。

○氷河期にほとんど絶滅するが、比較的温暖だった中国大陸に残る。

○日本には、仏教と共に鎌倉時代に伝わり、神社、寺に植えられた。

○雌雄異株。

○小石川植物園の大イチョウ（雌株）、年輪抽出より300歳と推定。平瀬五郎氏により、この木にて採取した種子で精子を発見し、種子植物にも精子が存在することが発見された。

○種子、銀杏には、デンプン、脂肪、レシチン、カロチン、ビタミンB1、ビタミンCなど含まれれる。

○葉には、フラボノイド、ジテルペノイドなど。緑色の葉に血圧降下、コレステロール値低下などの薬効がある。

○銀杏には、微量の青酸配糖体（アミグダリン）が含まれ、多量に食べると中毒を起す。子供は5粒まで。

○脳の働きをよくし、細胞のエネルギーを高める効能。

○銀杏割りバサミ?で、パチン、パチンと割り、金網で出来ている銀杏煎り器で、銀杏の緑が深くなるまで煎って・・・この美味しさはたまらない。

○昆布と酒と銀杏で炊く、銀杏ご飯、銀杏の緑が美しく、恐竜を思いながらいただくのは最高ですよ。

今泉由利

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
TEL　（〇三）五九二四-二〇六五

◇URL　http://imaizumiyuri.jp/
E-mail　yuriimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行　今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制　廃止。

◇新しく購読を希望される方　一ヶ年五千円。

◇振替口座　〇〇八三〇-六-五六二二九

◇原稿送付先　〒一一四-〇〇二二
東京都北区王子本町一-二六-六-A
今泉由利　宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。